

ネット上のトラブルや「いじめ」に関する報告

— 中学・高校生当時の体験を回想して —

三島浩路¹⁾ 黒川雅幸²⁾ 大西彩子³⁾ 本庄勝⁴⁾ 吉武久美⁵⁾
長谷川輝之⁴⁾ 長谷川亨⁴⁾ 吉田俊和

問 題

インターネットに接続可能な携帯電話やパソコンの利用が、高校生や中学生の間に広がるに伴って、こうしたメディアを利用した「いじめ」が起きるといった問題が報告されるようになった (e.g., Campbell, 2005; Li, 2006; 文部科学省, 2008)。

「いじめ」全般に関しては、「いじめ」の問題を第三者に相談することが、「いじめ」解決に貢献する割合は、「いじめ」被害を訴えた児童・生徒の年齢が上昇するのに伴って低下する (Rigby, 2007)。また、「いじめ」被害を申し出ても、十分なサポートが大人から得られないと考え、いじめられていることを被害者が報告しないこともある (Roberts & Coursol, 1996)。そのような中、メディアを利用した「いじめ」に関しては、校内に携帯電話を持ち込むことを禁止している中学校や高等学校が多いことから、携帯電話の利用が原則的には学校外でなされるために、一般的な「いじめ」に比べて学校の介入の程度が低いことが予想される。さらに、学校非公式サイト (通称「学校裏サイト」) 等へ不特定多数からの攻撃的な書き込みが行われたことにより不快感を覚えた生徒が「いじめ」被害を学校に訴えた場合、ほとんどの書き込みが匿名で行われているために、書き込みを行った相手を特定することが難しい上、そうした書き込みを行った者が、「いじめ」被害を受けた生徒と同じ学校の生徒であるとは限らないために、学校が指導を行える範囲を超えている場合もあるなど、有効な対策を学校が講じることは容易ではない。

しかし、携帯電話などのメディアを介して伝えられたメッセージにより、不快感や不安を感じるなどして「いじめ」被害に遭った生徒に対する支援を考える場合、学校に期待される役割は大きい。メディアを利用した「いじめ」被害生徒に対する支援の方法を考えるためには、ネット上で行われたどのような事柄や、ネットを介して伝えられたどのようなメッセージが、心理的なダメージを与えるのかを明らかにすることが必要である。また、学校非公式サイトなどに多数の不快感な書き込みが行われる場合、学校内で起きた出来事が切っ掛けとなって書き込みがはじまり、書き込みの量や内容がエスカレートして行くことが考えられ、学校非公式サイトなどに多数の不快感な書き込みがなされる場合でも、その背景には学校生活をはじめとした日常生活の出来事が関連している (荻上, 2008)。そうした日常生活の出来事が、不快感な書き込みに関連しているということは、書き込みを行った者は、書き込みをされた生徒の身近な存在である可能性が高い。

学校非公式サイトなどの書き込みの中には、「うざい」「消えろ」などといった否定的な単語により不快感を与えるものもあるが、当事者に近い者にしか理解できない文脈に依存し、そうした文脈を理解している者にとっては不快感を覚える内容であるが、文脈をまったく理解していない者にとっては、書き込まれた事柄の意味すら分からないものもある。

たとえば、「A男がいなくなった後、みんなで笑った」という書き込みは、書き込み自体が、不特定多数に不快感を与えるものではない。しかし、このクラスの中で孤立しているA男が授業後、教室を出るときに、A男を嘲笑するような笑い声起きたという出来事を、この書き込みを見たA男が知った場合、A男は不快感を覚えるだろう。

ところで、児童・生徒が学校生活で体験する「いじめ」に関しては、直接的な「いじめ」だけでなく、特定の児童・生徒を仲間はずれにしたり、無視したりするような

1) 中部大学現代教育学部

2) 福岡教育大学教育学部

3) 甲南大学文学部

4) 株式会社KDDI研究所

5) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 吉田俊和)

方法で行われる間接的な攻撃による「いじめ」があることが指摘されている (Crick & Grotpeter, 1995)。こうした間接的な攻撃によって行われる「いじめ」は、暴力行為をはじめとした直接的な方法によって行われる「いじめ」に比べて、ある年齢以上では相対的に発生頻度が高く (Rivers & Smith, 1994)、また、予防・解決がより難しい (三島, 2010)。

学校非公式サイトをはじめとしたネット上で、被害生徒に不快感を与えるような書き込みを行うことは、ネットを利用した直接的な「いじめ」といえよう。一方、学級内の仲間集団に所属するメンバー相互が連絡できるサイトをネット上に作成した後、仲間集団に所属している特定の生徒をそのサイトから排除したり、仲間集団の中の特定の生徒を除いたかたちでメールのやりとりをしたりする方法で、心理的なダメージを特定の生徒に与える方法によるネット上の「いじめ」は、学校非公式サイトなどで行われる「いじめ」と対比する意味で、ネット上での間接的な「いじめ」といえよう。一般的な「いじめ」に関しては、中学生や高校生の段階では、間接的な「いじめ」が、直接的な「いじめ」に比べて相対的に多い (e.g., 三島, 2008) ことから、ネット上の「いじめ」に関しても、中学生や高校生の間では、間接的な「いじめ」が行われている可能性がある。

ネット上での間接的な「いじめ」に関しては、被害者と加害者が互いのメールアドレスを知らせ合うなど、対面関係においても友人関係にあることが想定できる。そうした関係にありながらサイトから排除されたり、自分以外の親しい友人同士がメールのやりとりをしているにもかかわらず、自分だけにはメールが送られてこなかったりすることにより感じる不快感や不安は、学校非公式サイトに多数の不快感書き込みをされることにより感じる不快感や不安とは、異なったプロセスで生じるのではないだろうか。

本報告では、中学生や高校生当時のことを大学生に回想させ、携帯電話をはじめ通信メディアに関連したネット上のトラブルや「いじめ」について、自分自身が体験した内容や、身近なクラスメイトなどが体験した内容を収集した。そして、被害者と加害者はどのような関係にあるのかという点や、教師をはじめとした第三者のかかわりが問題解決に貢献する可能性、さらには、どのような要因により被害者がダメージを受けるのかについて、収集した資料を整理して検討する。

方法

1 調査時期：2009年12月

2 調査方法：大学1年生に研究の趣旨を書いた用紙を

配布し、賛同した応募者を謝金付きで確保し、まったく知り合いではない大学院生が面接に従事した。被面接者に関しては、ケータイを利用したメール等によるトラブルや、ネット上での「いじめ」を体験した学生、あるいは、そうした体験をした知人がおり出来事の一部始終を熟知している学生を募った。

被面接者は17名 (男性9名 女性8名, 年齢18~23歳) であるが、被面接者のうち1名が二つの事例を報告したことから、事例の数は18となる。

面接内容：「ケータイを利用したメール等によるトラブルや、ネット上での「いじめ」について、自分自身の被害・加害経験や、自分の周りであった出来事についてお話しください」と、15~30分程度の話をするように被面接者に対して面接者が依頼した。面接に際しては、被面接者の同意を得た上でICレコーダーで会話を録音し、面接終了後、面接者がそれぞれ逐語記録を作成した。

なお、本論文においては、提供された話題の論旨が損なわれない範囲で、逐語記録に出てくる状況や会話等を、より一般的な表現に改めるなどして、被面接者が特定されないようなかたちでそれぞれの事例の概要を報告する。

結果と考察

1 被害者と加害者との関係

被害者と加害者との関係に関しては、ネット上だけの関係から恋愛関係まで、多様である。被害者と加害者との関連を中心に5つの事例を紹介する。

事例1【肖像権を侵害している可能性がある女性への攻撃】

ブログにアイドルの画像を貼っている女性 (被害者) に、「肖像権を侵害している」などと高圧的で攻撃的なメールを同じブログを利用している多数が送った。送る側は、正義感に基づいて行っているようだったが、「死ね」などと書き込む者もあった。こうした書き込みに対して被害者が反論すると、攻撃はエスカレートした。被害者の反論が無くなり、無反応になると攻撃も解消したが、被害者もブログの更新を行わなくなり、ネット上から姿を消した。

事例2【副次的な問題に対する不特定多数からの攻撃 (個人情報流出の恐怖)】

A (一次被害者) が描いたイラストはネット上でも好評で、賞賛の言葉がネット上で頻繁に贈られていた。そんなAの描くイラストがある時期から大きく変わり、有名な漫画家のイラストに似てきた。ネット上でAの友人であったB (二次被害者) は、Aとはまったく面識がない。Aが描いたイラストを見て、有名な漫画家の作品を真似

していると思ったBは、「真似しているの?」と書き込んだ。その書き込みの後、Aはネット上から姿を消した。AとBのこうしたやり取りは、だれもが閲覧することができるネット上で行われていた。そのため、このやり取りをみていた不特定多数が、ネット上からAを追い出したBを悪者扱いするようになった。そして、「Bの実名や学校を調べよう」「Bの個人情報を徹底的に調べ上げよう」などと、「2ちゃんねる」上で呼びかけが行われ、Bに関する情報が交わされるようになった。その後、Bもネット上から姿を消した。

以上の事例は、ネット上での攻撃に関するものではあるが、当事者同士が日常的にかかわりをもっていた可能性は小さい。そのため、ブログの更新を止めたり、ネット上での書き込みを止めたりすることにより攻撃はなくなり、日常生活における影響も限定的なものだったと考えられる。しかし、今回収集した18事例の中で、上記のように当事者がネット上だけの関係という事例はこの2事例だけであり、他の事例は、当事者がクラスメイトであつたり同じ部活動に所属する仲間であつたりするなど、日常的にかかわり合いがある者同士であつた。

事例3【友だち同士でつくったホームページでの非難】

AとBは同じ高校のクラスメイトであり友だちでもあつた。二人は協力してホームページを作成した。作成した当初は楽しい雰囲気ホームページだったが、AがBを攻撃する内容へと変わっていった。こうした変化を不愉快に感じ、同時に不安を覚えたBは、ホームページを閉鎖するように働き掛けた。ホームページが閉鎖されたころ、AとBとの学校での様子も疎遠になった。

事例4【かつての交際相手からの攻撃】

高校2年生のA女(被害者)が、B男(男子生徒)と交際をはじめて1ヶ月が経過したころ、A女が通っている高校の学校裏サイトに、A女を誹謗・中傷する書き込みが行われた。書き込みの内容から、書き込みを行ったのはB男が以前に交際していた女子生徒(C女)によるものと思われる。当初は散発的な書き込みだったが、その書き込みが切っ掛けとなりA女を誹謗・中傷する書き込みは増加した。それらの書き込みも、同じ高校に通っている生徒によるものと思われることから、A女は同じ部活に所属する仲間に相談した。そして、不快な書き込みを行ったと思われる生徒のところへA女の友人が数人で行き、書き込みを止めるように話した。その結果、書き込みは無くなった。

事例5【交際を断った相手からの攻撃】

高校3年生のA女(被害者)は、クラスメイトのB男(加害者)から交際を申し込まれたが断つた。その後、A女のプロフ⁶⁾に「死ね」「学校をやめろ」などという匿名

の書き込みがあつた。A女は友人に相談し、友人の助言にもとづき高校の教師に支援を求めることにした。そして、A女は、事態の概要を教師に説明した。説明を受けた教師は、A女の承諾の下、本事例についての概要を学年集会を開き同学年の生徒に伝え、今後、このような書き込みを絶対に行わないように指示した。その結果、書き込みは無くなった。

事例3のように極めて身近な者が当事者になる問題や、恋愛といった個人的な出来事が背景にある事例4・5の問題など、今回収集した事例では、日常的に接点がある者同士の問題が多く語られた。

事例の多くが日常的に接点がある者同士の間で生じる問題であることから、教師や保護者の介入は、こうした問題に対してこれまで考えられていた以上に有効である可能性もある。事例5に関して、教師が学年集会を開いたことが問題の解決に貢献していることから、教師や保護者が問題の解決に貢献するケースは、ネット上の問題に関しても多いのではないだろうか。

2 教師や保護者等の介入

事例6【教師・保護者の介入】

A女(被害者)が中学2年生の夏、クラスメイトのB女(加害者)は、ネット上に公開している自分の「日記」の中に、A女を含めた同級生4人の実名を挙げて、「お前たちがいなければ、私の中学校生活はもっと良いものだった」などという書き込みを行ったり、「死ね」という言葉を画面一杯に書き込んだりした。「日記」の中のこうした書き込みはその後も続いた。しかし、中学校での実生活には何の変化もなく、ネット上だけの出来事だった。当初、A女をはじめとした被害者は、ネット上のこの「日記」の存在を知らなかった。偶然、この「日記」をクラスメイトが見つけた、被害者に伝えたことで問題が発覚した。

「日記」を見たA女たち被害生徒は落ち込んだ。自暴自棄になったり、八つ当たりをしたりすることもあった。そんな様子を見たA女の母親が、「なにかあつたの…」と、A女に声を掛けたが、当初、A女はいらいらした様子を見せるだけで、何の返答もしなかった。同様の被害を受けたC女の母親から、A女の母親にこの問題についての話があつた。こうして、保護者も問題を知り、被害を受けた4人の女子生徒は相談して、問題の「日記」をプリントアウトして教師に見せた。学校側は管理職を中心に対応策を考えた。はじめに、B女が学校から呼び出され、この次第について説明するように求められた。B女は、自分がやったことを認めて謝罪した。なぜ、こんなこと

6) プロフ：プロフィールサイトの略語。インターネット上の自己紹介ページ。

をしたのかと問われたB女は、「A女たちから自分が嫌われていると思ったからやった」と答えた。A女たちの「グループ」にB女も入りたかったのだが、タイプが異なり、仲間入りすることができなかったのだ。そのことを、A女たちから「避けられている」とB女は感じ、こうした書き込みを行った。

この出来事が起きて数年後、「過去の出来事」として問題を客観的に述べるができるようになったA女に比べ、B女は問題を引きずっているようであった。事件が起きてから数年後、同じ地域に住むA女がB女に偶然出会い、何の気なしにA女が声を掛けたところ、B女は逃げるように目を合わさずに去って行った。

事例7【教師の介入】

被害者が中学3年生のころ、親しい友人がふざげ半分で学校裏サイトに、被害者が公開されたくないと思っている写真を貼り付けた。そして、その写真を見たクラスメイトが、写真をおもしろがるコメントを被害者の「リアル⁷⁾」に書き込んだ。被害者は友人である加害者に対して写真を削除するように求めたが写真は削除されなかった。そこで、中学校の教師に相談した。相談を受けた教師は、写真を掲載した生徒と、「リアル」に書き込みを行ったと思われるすべての生徒を集め、写真を削除すると共に、この件について書き込むことを禁止した。その後、写真は削除され「リアル」への書き込みも無くなった。

事例8【住民相互のつながりが強い地域での保護者の介入】

中学3年のA女（被害者）が作成したホームページの掲示板に、「ああああ」などと意味が分からない書き込みが頻繁に行われた。書き込みを行った相手を調べたところ、あまり親しくない同じクラスのB男だった。書き込みをやめるようにA女はB男に話したが、その後も意味不明な書き込みが続いた。A女が住んでいる地域は、住民のつながりが強い地域で、保護者同士が互いをよく知った間柄だった。そうした地域であるため、「これ以上書き込みを続けたら、このことを母親に話して、わたしの母親からあなたの母親に言いつけてもらう」とA女がB男に強く言うと、書き込みは無くなった。

これらはすべて中学生の頃の事例であるが、教師や保護者の介入により問題が解決されることを示している。また、次の事例のように部活の先輩の介入により問題が解決した事例もある。

事例9【部活の先輩の介入】

7) リアル：現在の気持ちなどを即時に書き込むことができる携帯電話向けの簡易的ホームページブログサービス。

A男（被害者）は高校に入学し、バスケットボール部に入った。A男は、身長が高く目立つ生徒であったために、先輩から目をつけられ、「生意気だ」などという書き込みが学校裏サイトの掲示板になされた。そうした書き込みをA男は無視し続けた。しかし、書き込みは収まらずエスカレートし、その内容は、A男本人だけでなく、A男の友人や恋人にまで及んだ。掲示板にはこのような書き込みが行われていたが、部活動をはじめとした学校生活の中で嫌がらせをされることはなかった。A男が部活動を続けていく中で、一部の先輩と親しくなった。そして、親しくなった先輩が、掲示板に書き込みを行う先輩たちに、書き込みをやめるように話し、書き込みは無くなった。

教師や保護者、さらには部活動の先輩の介入により問題が解決したケースがある反面、教師や保護者に相談することが難しい事例もあった。

事例10【教師や保護者へ相談できなかった問題】

中学3年生のころ、A男（被害者）が、所属していた学級の雰囲気は殺伐としていた。そうした雰囲気が学校裏サイトにも現れ、学校裏サイトの掲示板には、ひどい書き込みが頻繁にみられた。はじめは、冗談めいた書き込みであっても、その書き込みに同調する者が現れ、書き込みが増えるだけでなく、内容もひどいものになっていった。

学校裏サイトの掲示板にA男の名前が載ることはなかった。しかし、同じクラスの生徒と思われる相手からの不快なメールがA男に届いた。メールの内容は確かに不快なものだったが、それ以上にAを不安にしたのは、学校裏サイトの掲示板に自分の名前が出ることだった。このメールを受け取ったとき、教師や保護者に相談しようとも思ったが、結局、教師にも保護者にも相談することができず、中学校を卒業するまで、不快なメールはたびたび届けられ不安な日々は続いた。

この事例（事例10）で、被害者が所属していた学級は学級崩壊に近い状況にあったと思われる。そのため、学級内で生じる問題に関しても学校が十分に対応できない状況にあったのではないだろうか。学級の問題すら十分に対応することができない学校に、ネット上の問題まで対応することは困難だろうと被害者が判断し、この事例では、学校に支援を求めなかったとも考えられる。

3 問題の解消

教師や保護者などの介入により解決した問題もあるが、問題が自然消滅した事例や、極めて深刻な問題に発展してしまった結果、ネット上の問題が消失した事例も報告された。

事例11【文化祭に関する問題】

高校2年生の文化祭の直前、文化祭の出し物をクラスで議論している時、二つのアイデアがA女とB女からそれぞれ提案された。二つのアイデアのどちらを取り入れるのかを多数決で決めたと、A女のアイデアが採用された。自分のアイデアが採用されなかったB女は、ネット上に付けている「日記」に、相手がA女と分かるような悪口をあからさまに書いた。それを見たA女は、「あの書き込みは何だ!」と、「リアル」を使って反撃し、双方がネット上で誹謗中傷合戦を行った。しかし、こうした誹謗中傷も、文化祭が終わると同時に解消した。

事例12【学校祭での応援団に関する問題】

A男は高校3年生のころ学校祭で応援合戦を行うために応援団に所属した。応援団はネット上に連絡用の掲示板を作成した。そこに、歪曲した表現ではあるが、A男の悪口が書かれた。また、同じ応援団に所属すると思われる数名の男子生徒が女子生徒になりすまし、A男のケータイに「好きだ」などというメールを送った。こうしたメールなどをA男は無視し続けた。そして、学校祭が終わり応援団が解散すると同時に、掲示板はなくなり、不快なメールがA男のケータイに届くこともなくなった。

事例13【修学旅行後の問題】

修学旅行が終わった高校2年生の11月、A女を含めた数名の女子生徒について、クラスのホームページの掲示板に、修学旅行中の出来事を挙げて「きもい」などという書き込みがされた。内容から判断して、同じクラスの男子数名が行ったと思われる。「書き込みを止めるように」などと、この書き込みに反応すると、書き込みがエスカレートするとA女たちは考え、書き込みを無視し続けた。そして、高校2年生の3月にクラス替えが行われた後、書き込みは無くなった。

事例14【なりすましの書き込みを行った結果、学級にいざらなくなった事例】

高校2年生のA男（被害者）になりすまして、B男のブログに「自分（A男）は同性愛者」という書き込みをC男が行った。この書き込みをみたB男が、書き込みの内容を周りの生徒に話したため、問題が発覚し、学校側が知るところとなった。事態を知った学校は、A男になりすまして書き込みを行ったC男を指導した。指導を受けた後、C男は1週間ほど学校を休んだ。その後、周りの生徒はC男を避けるようになった。特にC男からのメールを受け取ることを嫌がる雰囲気学級に広がった。もともと内向的だったC男は、この事件を切っ掛けにしてますます内向的になった。C男がいたクラスは進学クラスで、C男の成績は決して悪くはなかった。しかし、ク

ラスの雰囲気に耐えられなくなったC男は、自分から希望してレベルが下のクラスに籍を移した。

事例15【被害者・加害者が不登校になった事例】

学級の多くの生徒が利用するネット上の掲示板に、中学3年生のA女（被害者）のことを「むかつく」「うざい」などといった書き込みがなされた。当初は1名によって行われた書き込みだが、次第にたくさんの生徒がA女に不快感を与える書き込みを行うようになった。最初に書き込みを行った相手が、B男であることを知ったA女は、B男に激しい怒りを覚え、B男を殴った。この暴力事件の後、A女がB男を殴ったことを非難する書き込みが掲示板に行われ、A女は不登校となった。さらに、A女が不登校となった原因が、掲示板に書き込みを行ったB男にあるという話が学級内で広がった。その結果、B男も不登校となった。

4 心理的なダメージに影響する要因

これまでみてきた事例のいくつかは、掲示板等の不快な書き込みをみて、ダメージを受けた事例だった。これらの事例では、掲示板を見なければダメージを受けることはなく、自己防衛の方法として掲示板等を見ないという方法も考えられる。だが、自己防衛の方法として、掲示板等を見ないという方法が採られにくいことも次の事例から示唆された。

事例16【掲示板を見ずにはいられない心境】

高校入試の時期、推薦合格を既に得ている男子生徒数名が、ネット上に掲示板を立ち上げた。最初はたわいもない内容が書かれていた掲示板だったが、内容が変化し、匿名での悪口が増えた。そんな中、明らかに被害者A女を意識した悪口が書かれた。同じ中学の多数の生徒がこの掲示板を見たり、掲示板に書き込んだりすることができるために、その後、被害者A女に対する攻撃的な書き込みは増加した。そうした書き込みの存在をA女も知るところとなった。「こういう書き込みはやめよう」という匿名の良心的な書き込みが掲示板にされることもあった。しかし、良心的な書き込みが行われると、A女に対する悪口を書き込んでいると思われる人たちから、「おまえはだれだ」というような書き込みがなされ、良心的な書き込みを行った者に攻撃の矛先が向けられることもあった。

掲示板を立ち上げた男子生徒たちから何かを直接言われたわけではないが、男子生徒たちに対する恐怖感をA女は覚えた。また、掲示板を立ち上げた男子生徒以外からも、不快な書き込みがあったことから、不特定多数から、自分は否定的に思われているのだと思いA女は悩んだ。学校の廊下を歩いているときも、見ず知らずの生徒から何か言われるのではないかと被害妄想をA女は

抱くようになった。こんな状況に陥ったA女であるが、帰宅後、その掲示板を見ずにはいられなかった。掲示板を見なければ不快な書き込みを目にすることもないのだが、どんな書き込みがあるのかという不安が、掲示板を見る行動に駆り立てた。そして、掲示板に不快な書き込みを見つけては、さらに、恐怖感や不安を募らせた。

書き込みの内容がこうした方向にエスカレートした結果、掲示板の管理会社の方で、内容が削除されることが多くなった。また、掲示板を立ち上げた男子生徒たちも、他の生徒の入試が終わり、一般入試を受験した生徒と一緒に過ごす時間ができたことで暇をもてあますことが無くなったようで、その後、掲示板の書き込みは無くなった。

不快な大量の書き込み以外にも、返信がないなど、自分の存在がネット上で無視されたり、排斥されたりすることがダメージになるという事例もみられた。

事例17【返信の遅延・メールの減少が不安を駆り立てる】

A女(被害者)は、同じクラスの仲良し数名で仲間集団をつくっていた。高校2年生の夏頃から、この仲間と話をしているとき、自分だけが話題についていけないことを感じるようになった。そして、自分が知らない間に、自分以外の友人同士がケータイを介してメールをやり取りしていることが分かった。こうした状況がその後、半年ぐらい続いた。この期間、仲間とのメールのやり取りは少なくなり、仲間からの返信も以前に比べて遅くなった。A女は寂しさや孤独感を感じたり、不安を覚えたりした。また、活動意欲も低下し、クラスの中で一人で過ごす時間が多くなった。

それから半年ほど経過した後、久しく交流が途絶えていた仲間と自然に会話が生まれ、A女は以前のような仲間づきあいを再開した。

事例18【女子生徒に誤解された結果、ネット上で無視される】

A男(被害者)が、ある女子生徒のあとをつけたと誤解された。誤解した女子生徒が、自分のあとをつけたと思ひ込み、A男のことをストーカーのように周りの女子生徒に話した。その結果、誤解が拡がり、クラスメイトにA男がメールを送っても無視されたり、実際の生活場面でも、他の生徒から避けられたりするようになった。A男は体調を崩し、周りの生徒との会話も少なくなった。このような状況に耐えられなくなったA男は、友人の男子生徒に相談した。相談を受けた男子生徒が、女子生徒の誤解を解き、無視されたり、避けられたりすることは無くなった。

総合的な考察

1 被害者と加害者との関連

ネットを媒介とした「いじめ」は、未知の不特定多数から誹謗中傷を受けるといった形態によるものが多いと予想していた。しかし、面接調査の結果は、同じクラスや同じ部活に所属する生徒、場合によっては親しい間柄の問題が大部分であった。この結果は、日常生活の出来事が、ネット上での「いじめ」に関連するという荻上(2008)の指摘を裏付けるものである。

2 教師や保護者等の介入

平成20年に文部科学省が行った「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」の中で、「掲示板」やメールで悪口を書かれたときの相談相手として、教師を選んだ生徒は15%にも満たなかった。しかし、面接調査の結果からは、被害者・加害者が同じ学校の生徒であることが多いために、教師や保護者が介入することにより、「いじめ」が解消したケースもあり、ネットを媒介とした「いじめ」に関しても、教師や保護者の役割について改めて考え直す必要があるのではないだろうか。ただし、こうした問題の存在を教師が最初に気づき、解決に向けた取り組みを開始した事例はなく、その背景には、ネット上における生徒相互の関係に関して、教師が情報を収集することが難しいといった現状があると思われる。

3 問題の解消

文化祭や修学旅行など学校行事に関連して生じた問題は、行事が終了したり、年度末にクラス替えが行われたりすることにより解消することもある。学校行事の期間や前後の期間は、生徒間のコミュニケーションが活発になるために、ネット上においてもトラブルが生じやすいのではないだろうか。ネット上のトラブルや「いじめ」に関しても、問題が生じやすい時期と生じにくい時期がある可能性がある。

ところで、ネット上の問題が原因で不登校になったり、学級に居づらくなったりするなど、より深刻な事態に陥った結果、ネット上の問題が無くなるケースもある。ネット上のトラブルや「いじめ」の多くが日常的に接点をもつクラスメイトなどの間で生じていることから、日常生活の中で進行している問題とネット上の問題の双方について総合的に理解した上で、支援を行うことが重要である。

4 心理的なダメージに影響する要因

面接調査の中で問題となった事柄の多くが、親しい友人やクラスメイトなど、既知の人間関係上の問題であった。また、そうした問題に直面した被害者は、不安感や孤独感を感じたり、怒りを覚えたりした。不安感や孤独

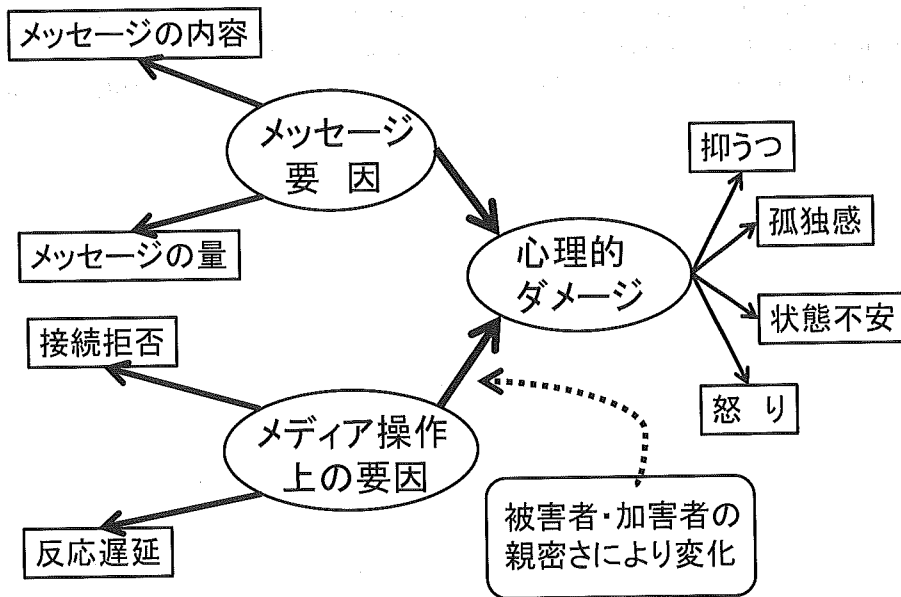


Figure 1 心理的ダメージに影響する要因に関する探索的モデル

感など、面接の中で語られたネガティブな心理的变化を測定することにより、心理的ダメージの大きさが測定できると考えられる。

被害者に心理的ダメージを与える要因として、「うざい」「学校を辞めろ」などといった携帯電話を利用してメールで送り付けられた『メッセージの内容』や、「死ねという言葉が画面一杯に書かれていた」、「…調子に乗って、書き込みがどんどん増えた」などといった『メッセージの量』といったものが考えられる。これらをまとめて「メッセージ要因」とする。

また、親しい友人に送ったメールに対する返信が遅いことや、自分以外の仲間がメールをやり取りしているサイトに入れないといった『接続拒否』も、心理的ダメージに影響を与える要因になると考えられる。これらをまとめて「メディア操作上の要因」とする。ところで、相手との関係が親密であればあるほど、そうした親密な相手からの『接続拒否』や『反応遅延』は、より大きな心理的ダメージを生じさせる可能性があることも考え合わせ、以下のような探索的モデルを作成した。今後は、質問紙法により多数のデータを収集し、モデルの妥当性を検証したい。

引用文献

Campbell, M. A. (2005). Cyber bullying: An old problem in a new guise. *Australian Journal of Guidance*

and Counselling, 15, 68-76.

Crick, N. R. & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66(3), 710-722.

Li, Q. (2006). Cyber bullying in schools: A research into gender differences. *School Psychology International*, 27, 157-170.

三島浩路 (2008). 校種間にみられる女子の「いじめ」の違い—女子大学生を対象にした調査の結果から—東海心理学会第57回大会発表論文集, 32.

三島浩路 (2010). 「いじめ」4類型に対応した予防・解消策に関する文献研究 中部大学現代教育学研究紀要 3, 31-41.

文部科学省 (2008). 平成19年度 児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査

文部科学省 (2009). 子どもの携帯電話等の利用に関する調査

荻上チキ (2008). ネットいじめ—ウェブ社会と終わりのなき「キャラ戦争」 PHP 新書.

Rigby, K. (2007). *Children and bullying: How parents and educators can reduce bullying at school*. Blackwell Publishers Inc.

Rivers, I. & Smith, P. K. (1994). Types of bullying behavior and their correlates. *Aggressive Behavior*, 20, 359-368.

ネット上のトラブルや「いじめ」に関する報告

Roberts, W. B., Jr., & Coursol, D. H. (1996). Strategies for intervention with childhood and adolescent victims of bullying, teasing, and intimidation in

school settings. *Elementary School Guidance and Counseling*, 30, 204-212.

(2010年11月15日受稿)

ABSTRACT

A Report about Trouble and “Cyberbullying” via the Internet and Cell Phone:
Looking Back on Experiences in Junior High and High School Days

Kouji MISHIMA, Masayuki KUROKAWA, Ayako ONISHI, Masaru HONJO, Kumi YOSHITAKE,
Teruyuki HASEGAWA, Toru HASEGAWA and Toshikazu YOSHIDA

We asked 17 freshmen to recollect trouble and “cyber-bullying” via the Internet and cell phone that they had actually experienced or heard about from their classmates during junior high and high school days. As a result of our analysis, the victim and the bully often belonged to the same class or club activity, and they were close friends of each others in some cases. Therefore, it was suggested that the intervention of a teacher and/or a guardian is effective to solve the problem. Furthermore, other than unpleasant “email messages” and the “length of unpleasant email messages”, it was found that being disallowed to enter the web site where other friends communicate with one another and being late in reply to one’s email may also cause psychological distress.

Key words: cell phone, cyber-bullying, junior high student, high school student, human relations